

罪のなやみ（二）

深い罪悪を犯した。

相手の人が復讐をしようとする。それが怖い。どうにかしてそれから逃げたい。するどい良心の声が聞こえる。どうしたらいいのか。

乙「ここに人間の進む四つの道がある。

第一は、できるだけごまかして、いいかげんに時の経過を待つ。

第二は、苦しんだあげく、気の小さい人は死んでゆくか、逃げてかくれてしまうかである。

第三は、もつと悪の心を強く動かしてあべこべに相手をやっつけてしまう人である。

第四は、一切を超えて救われる道である。

以上の四つの道のあることを申しましたが、あなたは今、悪心をつのらせてあべこべに相手をやっつけるような、悪無碍の世界に墮つることはできない、できるだけごまかして、いいかげんに時のたつにつれてどうにかなるだろうと、ずるく構えることも許されません。ただあなたは苦しんでおられます。ともすれば逃避的な相をもちつつも。」

甲「私はまったく困ってしまいました。一度犯した罪悪はとりかえしはつかないとおっしゃいますし、その実、私は相手の復讐も恐れています。まったく顔をすててもやると言いますから。ただ、私には後悔があるばかりです。」

乙「後悔だけだのお言葉、まことによくあなたの今を言い表わしてあります。だんだんと細くて暗い穴にでも入るような、行きづまりだけでしょう。そこを、何ものでもごまかさず、そして後ろに帰ろうとせず、逃げようとせずに、じつと思惟しなさい。」

甲「それでは行きづまるばかりであります。暗くて苦しくなるばかりであります。」

乙「苦しくても仕方がありません。私はあなたを他の道につれ出そうとはしませぬ。行きづまるものは行きづまるよりほかありません。今日まであなたは考えぬかねばならぬことを考えぬかなかったのです。また聞きぬかなかったのです。ただぼんやりと苦しんでいたのです。それこそ危険なことです。あなたは、地位が失われることを心配しています。だれでもそうではあります、なんとというずるい態度でしょう。ほんとうはそれがいちばん嫌なのではありませんか。」

甲「確かにその心であります。」

乙「あなたは甘えています。今も私にさえ甘えています。しかし、あなたは今、たつた一人、灰色の大地にたたずんでいて、あなた自身のつくり出した魔軍のために追いつめられ、刻々に滅ぼされているのです。しかもなお、魔軍は、逃避せよ、自暴自棄になれ、そこをどうにかしてごまかせ、この先生に泣きついて最後の逃げ場を見出せ、等々の誘惑によって、あなたを道より遠ざかせようとするのです。しかし私だつて、どうにもしてあげようはありません。……………泣いたつてだめです。もつと考えてごらんさい。」

……………長らく二人とも沈黙……………。

甲「先生！……：……：一切が間違っていました。私は今日お伺いしなかったならば、救うべからざる闇の底に沈んで一生を葬ってしまうところでした。私の一切は間違っていました。先生！ 私は今、ほんとうにあやまりたい心でいっぱいです。今までは、たびたびあやまつたような形はとりましたけれども、真実を言えば、そうして相手の心を和らげて、私の安全をはかろうと思う心でしていたことです。それは先生のいわゆる、先の細い暗い穴に入るまいとしたもがきの一つでした。けれども私は今、一切がだめであることがわかりました。逃げることも、もがくことも、ごまかすことも。そして私は一切を背負って立つことがいちばん正しいことを知りました。私の心は今静かにあやまりたい心でいっぱいです。何だか平和のおとずれてくるような気がします。」

乙「もしあやまつても相手があなただを許してくれなんだから、どうします。」

甲「幾度でも何度でもあやまります。しかしそれは相手がどうするかということではなくて、私にはこうするよりほかに生きる道がないのです。」

乙「たとい相手が、あなたを呪いつづけて、どんな復讐をしようとも、あなたの社会的地位をくつがえそうとも。」

甲「そうです、私は殺されたつてかまいません。私は今まで卑怯だったのです。私は今は何でも受けてゆきます。私は何だか広くなつたようです。」

乙「私といっしょに『歎異鈔』の第三章を拝読しましょう。」

善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや。しかるを世の人つねにいわく『悪人なおもて往生す、いかにいわんや善人をや。』と。この条一旦そのいわれあるに似たれども本願他力の意趣に背けり。そのゆえは自力作善の人はひとえに他力をたのみ欠けたるあいだ弥陀の本願にあらず。しかれども自力の心を廻して他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生を遂ぐるなり。煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死を離るることあるべからざるを憐みたまいて願をおこしたもう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よつて善人だに往生す。まして悪人はと仰せ候いきと、云々

静かに味わつてみましょう。

『善人なおもて往生を遂ぐ。いわんや悪人をや。』というお言葉がどんなに受け取られますか。」

甲「私は今まで、善人になろうともがいていました。悪人になるまいと、もがけばもがくだけ苦しかったのです。ですが、今こそ『善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや』とのお言葉がすなおに受け入れられます。」

乙「あなたが善人になりきろうとしたとて、一度失われた心、犯した罪がとりかえさねれようはありません。だが、ここにまつたく異なつた世界があります。それは如来の本願に立ちあがる世界であります。お念仏の世界がそれです。南無阿弥陀仏の信に生まれかわるのであります。『しかれば本願を信ぜんには他の善も

要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆえに、悪をもおそるべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆえに。』

善だとか悪だとか、逃げるとか隠れるとか、後悔だとか、そんな一切のはからいを超えて、如来の願力に立ち上るのです。人間ははからいます。はからうがゆえに、ますますその生き方が、孤立、抽象的になってきます。如来のおはからいに一切を托して、本願に乗じて、合掌念仏の世界に生まれ出る時、広い広い世界が待っています。卑怯と慢心から救われて。後悔の世界は狭い。しかし懺悔の天地は広い。過去、現在、未来の一切が、如来の浄火に燃えてのみ、悪のままを転じて善となし、徳と成し、永遠に生かされます。

私は、あなたの苦しかった過去がやがて新しく、尊いあなたの人生を生み出される母胎となることを信じます。あなたはあなたでなければできない生活と使命とを持つていられるはずです。理想の彼岸から招喚されています。」

甲「やつと私は、私の生きる世界を見出させていただいた気がします。どんな苦をもさげずに、生きさせていただきましょう。」